

北関東の下剋上と曹洞宗寺院

——結城氏・多賀谷氏と宇都宮氏・芳賀氏の場合——

広瀬良弘

はじめに

戦国期に在地領主の外護を受けて曹洞宗寺院が多数建立されたことについては、すでに述べたことがある。^①その際、その在地領主層への浸透とそれを通じての発展には、①在地領主連合（一揆的結合）関係に添っての展開、②一族関係（血縁・擬制的血縁関係）に添っての展開、③主従関係に添っての展開の三類型に分けることができることを指摘した。小論で扱う、結城氏から独立しつつあった下妻の多賀谷氏が建立した多宝院の場合には①の類型に属するし、宇都宮氏の重臣として活動した芳賀氏が建立した海潮寺（はじめは宝珠庵）は③の類型に属すると考えられるが、各氏の間にはそれぞれさまざまな関係があり、寺院建立の背景にもその事情が反映しているものと考えられるのである。小論では、それらについて検討を加えてみたいと思う。

一 結城氏・多賀谷氏と曹洞宗寺院

結城氏とその重臣多賀谷氏との「下剋上」と「誅伐」に関しては市村高男氏の見解があり、それと曹洞宗寺院との関係につ

いては大久保仁氏の見解があるので、それに導かれながら論を進めることにしたい。⁽²⁾

「多賀谷氏系図」(常総遺文)⁽³⁾七・「多賀谷旧記」⁽⁴⁾やその他の文書等から考えると、多賀谷氏は武蔵秩父氏の流れをくむ金子氏の一族であるらしく、少なくとも室町中期ごろには多賀谷氏が結城氏と婚姻関係などを通じて結びつき、その配下に属するようになったと考えられる。多賀谷氏は、多賀谷政朝の女と結城氏朝の弟である光義との間に生まれた子である。この多賀谷氏の弟に高経という人物がいるが、生存していた時代や「下総守」という受領名から、安穩寺に寺領を寄進している多賀谷下総守朝経であると考えられる。

安穩寺は応安四年(一三七一)に結城直光が、源翁心昭という曹洞禅僧を開山に招いて建立した寺院である。同寺は鍛冶町にあるがもとは玉岡というところにあった。いずれにしても結城城に付属する曲輪の一つである西館の近くである。この西館には、多賀谷高経(朝経)の孫である和泉守が住んでいたというから、あるいは多賀谷高経(朝経)もこの西館に居住していたのかも知れない。

西館の近くに古くから結城氏の外護する安穩寺が存在したということもあつたのであろうか、多賀谷高経と同一人物であると考えられる朝経が寺領を寄進している。

享徳三年(一四五四)十月二十三日に結城成朝が多賀谷朝経に宛てて書状を出している。⁽⁵⁾この「結城成朝書状写」は真偽に關しては検討を要する文書であるが、いまは、その内容には多少なりとも真実を伝えるものがあるとしてみることにしたい。

安穩寺跡之事、英中和尚之会下、可_レ被_二造立_一由之間、彼地寄附不_レ可_レ有_二相違_一候、万一律院等再興之儀候者、以_二改代_一、可_二付沙汰_一候、於_二此所_一者、尤_レ禅宗之繁昌所_レ仰候、謹言、

(奥筆)(享徳三年)

「康正」十月廿三日

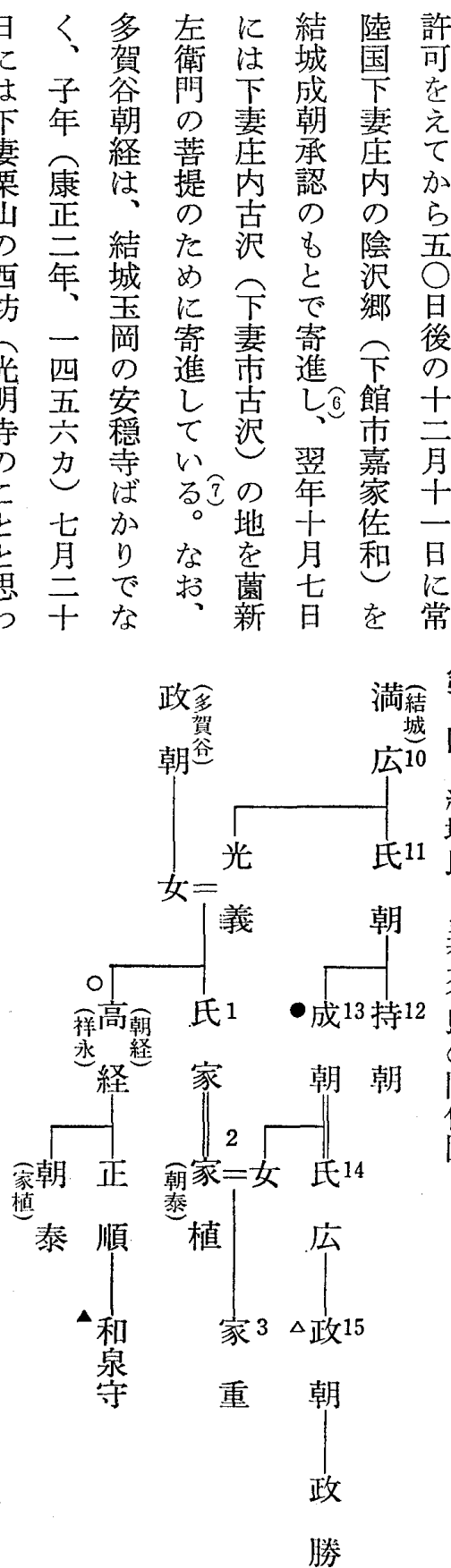
(結城)成朝(花押)

(朝経)多賀谷下総守殿

これによれば、安穩寺はもと律院であつた可能性が強い。そして、このころ、多少なりとも律院として再興されそうな動き

もあつたことが知られるが、いずれにしても同寺開山源翁心昭の弟子で同寺二世の大仙英仲（当時存命中）の門下によって、再興がなされることになり、それを認める旨を結城成朝が多賀谷朝経に伝えた書状である。安穩寺は結城直光が開創した寺院であつたが、このころには、結城氏よりも多賀谷氏の外護の方が厚くなつていたものと考えられる。

第1図 結城氏と多賀谷氏の関係図



○△ 謀殺・誅伐者
●▲ 被謀殺・被誅伐者

日には下妻栗山の西坊（光明寺のことと思われ）へ三貫五〇〇文の地を寄進し、⁽⁸⁾ 少し後の寛正六年（一四六五）七月二十六日には、小山寺（岩瀬町富谷）へ三重塔を寄進しているほどであるから相当の勢力を持った人物であつたものと思われる。⁽⁹⁾ これらのことをみると、多賀谷氏の安穩寺への寄進も同氏の勢力が増大した結果であつたとみることができよう。

結城成朝も、祖先直光の開創寺院である安穩寺を多賀谷氏の寄進のみにまかせていたのではなく、長禄元年（一四五七）十二月二十九日に結城郡上高橋郷を「禅智」という人物の菩提所として寄進している。⁽¹⁰⁾ 翌年十一月二日にも一〇〇貫文の地を寄進するとともに、⁽¹¹⁾ 同寺および同寺領の違乱を禁止する安堵状を發している。⁽¹²⁾

これには多賀谷朝経（高経）の勢力増大にともなう安穩寺外護に対して、結城成朝もそれへの対抗という意味もあつたので

はなかるうか。

おそらく、このころから結城成朝と多賀谷朝経（高経）との対立は深まっていったのであろう。ついに寛正三年（一四六二）十二月二十九日多賀谷高経（朝経）は結城成朝を殺害してしまうのである。成朝は二四歳であった。「結城家之記」によれば、幼少の結城成朝のもとで多賀谷兄弟は力を増長させ、兄の祥賀（氏家）は忠節を尽したが、弟の祥永（高経Ⅱ朝経）は兄の諫めるのもきかずに悪逆を重ね、幼少の成朝を軽蔑したという。¹⁸同書は後世の成立であるのでどこまでが真実かは不明であるが、成朝が成長するにしたがって、両者の対立が深まっていったことが考えられる。安穩寺はその過程で両者から寄進を受けてきたといえよう。

成朝を殺害してから三年後の寛正六年（一四六五）に多賀谷朝経（高経）は小山寺に三重塔を造立しており、その力が相当なものであったことは前述したとおりである。この朝経（高経）には正順と朝泰という二人の子がおり、正順は足が不自由だったので出家し、その子で和泉守と称する人物が朝経（高経）の跡をついでいる。正順の弟である朝泰は父朝経（高経）の兄である氏家に子になかったので、その養子となり、宗家を嗣いでいる。¹⁴この朝泰はのちに家植と称する。多賀谷家植は下妻に下妻城を築き、しだいに結城氏からの独立をはかっていった人物である。多賀谷氏がやくから下妻方面を中心に勢力を持つようになったことはさきにもみたように享徳三年十二月十一日に下妻庄内の陰沢郷を、翌年十月七日には下妻庄内古沢の地を寄進していることから知られるが、家植の代には下妻城を拠点に、そこから南方へ進出し、豊田・赤松・羽生氏らを配下に置いていくことに成功し、結城氏の重臣というよりは結城氏を盟主と仰ぎながらの同盟者という立場にまでなっていたのである。

一方、高経（朝経）の子で家植の実の兄である正順の子の和泉守は、結城城の曲輪である西館に居住し、主人である結城政朝をないがしろにし、結城の家臣を自からの配下に置き城主のようにふるまうほどの力を持つに至っている。¹⁵結城氏から独立しつつあった多賀谷家植は明応六〇七年（一四九七〇八）のころに和泉守を「退治」と称して常陸の小田政治と結んで、

結城城を攻めている。さきにみた結城成朝が殺害されたあとの同氏を嗣いだのは養子の氏広であったが、すでに文明十三年（一四八一）に三一歳で死去している。そのあとを嗣いだのが子の政朝であった。多賀谷家植の進攻に対して、多賀谷和泉守は防戦し、結城政朝も戦い、鬼怒川周辺で、小田・下妻の連合軍を敗っている。この戦で政朝も実力をみせたが、和泉守の悪逆は増進した。そこで政朝は今度は多賀家植を味方に引き入れ、和泉守「誅伐」を計画し、明応八年（一四九九）八月一日、ついに和泉守の住む西館に攻め込み、その首を取り、与党の者たちも「誅伐」した。¹⁶ここに政朝は多賀谷氏の「下剋上」を破り、独立していったこの常陸下妻城主の多賀谷氏をはじめ、常陸下館下館城主の水谷氏、有力一族の綾戸城（山川城）主であった山川氏の盟主として連合関係を維持し、勢力の拡大と支配の安定をはかる努力を続けていったのである。そして、大永七年（一五二七）、結城政朝は四九歳で隠居し、その子の政勝がその跡を嗣いでいる。¹⁷

この間に、安穩寺は文明十七年（一四八五）九月八日、多賀谷氏家より寺領の寄進を受け、明応元（一四九二）十一月八日、多賀谷朝泰（家植）より、養父氏家の供養のための寺領の寄進を受けている。¹⁹そして、結城氏は持朝の時代に安穩寺（源翁派）とは別の派の了庵派（その中の大綱派）の松庵宗栄を開山に招いて宝徳元年（一四四九）宮ノ下あたりに福嚴寺を建立している。同寺はのちの文明十一年（一四七九）洪水にあい、上小埜の地に移転し、乗国寺と改称して再興されている。結城氏と多賀谷氏が前述のような下剋上か誅伐かの対立を展開していた時代には、すでに存在したことになる。多賀谷氏が結城氏建立の寺院にもかかわらず安穩寺に外護を加えていたのに対して、結城氏は同じ曹洞宗でも別の派の福嚴寺（のちに乗国寺）を建立し、外護を加えていたともみることができよう。

このような経過があったためもあるう乗国寺の門派は安穩寺に比べて、この地域に展開をみせている。さきに記したように、結城氏を盟主と仰ぎながらも独立しつつあった。山川の山川氏は乗国寺開山の松庵宗栄の弟子の日州幸永を招き山川今宿に長徳院を明応八年（一四九九）もと天台宗の寺院を曹洞禅宗に改宗し再興建立している。下妻の多賀谷家植は十六世紀前半に乗国寺二世中明栄主の弟子である小伝宗闇を開山に招いて下妻城の近くに多宝院を建立しており、下館城主の水谷勝氏は下

館岡芹に乘国寺五世の良室榮忻を開山に招いて定林寺を建立している。また、山川今宿長徳寺からは三世が近くの大木に東光寺を、下妻多宝院の三世は多賀谷氏の家臣の桐ヶ瀬氏の招きで桐ヶ瀬の正法寺の開山となっている。それに乘国寺五世の弟子威巖瑞雄は水谷政村の招きに応じて天文十四年（一五四五）久下田に芳全寺を開山している。乘国寺門派の展開は最初に示した①在地領連合関係と③主従関係に添ってのものであった。²⁰

乘国寺の門派は同寺ばかりでなく、結城氏の外護を受けて寺院を開いている。乘国寺二世の中雄宗孚は十六世紀中期に大谷瀬の大勝寺の開山となっている。同寺はもと臨濟宗であったものが改宗されたもので、開基檀越は結城政朝夫人である。乘国寺四世の信及前豚は十六世後後半に結城の松月院の開山になっている。開基檀越は結城晴朝夫人である。

乘国寺門派のこのような展開がみられたわけであるが、同寺と同じ了庵派であるが無極派である独峰曇聚が永正十二年（一五一五）結城氏の外護を受けて永正寺（のちの孝願寺）を開いている。開山の培芝は小山氏の外護を受けていた大中寺の二世で天翁院の開山となっている人物である。当時結城政朝の次男高朝が小山政長の養子となっていた。なお、永正寺二世の笑顔正忻は結城政朝の子であるといわれており、事実であるかどうかはともかくとして、血縁の関係があったのであろう。大中寺門派の結城氏への進出は②一族関係（血縁・擬制的血縁関係）に添っての展開であった。²¹

十六世紀に入ると、乘国寺門派の周辺各氏への進出もはじまっており、永正寺も建立され、同じ曹洞宗でも他派の進出・発展がみられた中で、安穩寺の周辺には有力な外護者であった多賀谷氏が下剋上に失敗し、下妻を拠点に独立していった。マイナスの要素が多く存在する状態であった。このような中で、享祿二年（一五二九）安穩寺すなわち源翁派は永平寺からの出世（短期間の住持を勤めることにより「前永平」の称号を得ること）を行うようにという請状しやうじょうを受けて、出世を行ない曹洞宗教団内における一定の地位を得ようとした。それまでの源翁派は総持寺の輪住制（のちには出世の制度へと変化する）にも参加せず、曹洞宗教団の中では他派と行動を異にした門派であった。永平寺は、この出世に地方寺院を招くことにより、その際に一定の金銭を収めさせることにより伽藍の修造等を行っていた。ここに、永平寺と源翁派安穩寺の利害が一致し

たのである。当時、出世を果さなければ、江湖会（多数の僧侶が集まり、三ヶ月間の修行を行うことで、とくに住持と首座は教団内での地位を高くし、周辺の布教活動も有利に展開できるし、外護者である武士もその勢力を誇示することにもなった）ができないという不文律があったようであり、さまざまの意味で安穩寺は永平寺への出世を果そうとしたものと考えられる。

しかし、安穩寺の永平寺への出世には相模国関本の大雄山最乗寺（南足柄市）を拠点とし関東を中心に一大勢力を持った了庵派が猛烈な反対運動を起した。結城では乗国寺も永正寺もこの了庵派に属しており、とくに乗国寺は、この反対運動の中心的な存在であったようである。当時の永平寺は、関東の了庵派に相当部分頼っていたらしく、同派から援助を止めるといわれては、安穩寺の出世をこれ以上勧めることができず、断念せざるをえなかったのである。⁽²²⁾ 安穩寺は乗国寺を含む関東了庵派の反対の前に永平寺出世への路を断たれた。これ以降、安穩寺における源翁派はその勢力を失い、同派による寺院運営はたちゆかなくなっていくようである。同寺の七世までは源翁派の人物であったが、八世には永正寺（のちの孝顕寺）三世の伝葉全迦が入っており、了庵派に変わっているのである。これは、源翁派の力が衰えたのに対して了庵派が進出し発展を遂げ、結城政勝が同派の永正寺三世伝葉全迦、乗国寺四世の信及前隊に参禅したことによる。

政勝はある年の十二月二十六日、安穩寺に充てて書状を出している。⁽²³⁾ それによれば、安穩寺が了庵派に変わってから二人目のすなわち九世の伝室存的と入魂の間であり、自分の位牌（安穩寺殿大雲藤長居士）を仏壇の片隅に立てて「某寺（それがしのでら）と存候」と述べ、自からの寺であることを強調している。十六世紀半ばごろと考えられる。これにより安穩寺は、源翁派・多賀谷氏の寺から了庵派・結城政勝の寺に変わったとみることができよう。

さて、これまで、結城の寺院を中心にみてきたが、ここで、下妻城近くに建立された多宝院についてみると、同寺はさきにも記したように、多賀谷氏が結城氏内部での下剋上に失敗したのちの十六世紀前半に結城氏から独立し、結城氏と小田氏との対立を利用し、自からも結城氏を攻めるまでに勢力を強めた多賀谷家植が建立したものである。独立を示すシンボルとしての菩提寺多宝院であったとみることができよう。しかし、対立しながらも、周辺の強大な諸勢力との関連を考えると、結城

氏を盟主と仰ぐ同盟關係を維持していなければならず、その微妙な關係における潤活油的役割も担わせての建立であつたと考へられる。それは多宝院の開山に、結城氏が外護する中心的寺院であつた乗国寺二世中明榮主の弟子である小伝宗闡が招かれていることから知られよう。

二 宇都宮氏・芳賀氏と曹洞宗寺院

下野宇都宮氏の信仰は鎌倉初期に浄土宗、後半期には時宗および日蓮宗であつたが、鎌倉末期になると、禅宗信仰が受容されるようになってくる。貞綱が正和三年（一三一四）臨濟宗興禅寺（季都宮市今泉町）を建立している。開山に招かれたのは那須雲巖寺開山高峰顛日の弟子の真空妙応であつた。同寺は五山制度の中で諸山に列せられている。なお、貞綱の息男公綱の菩提寺として正眼寺が建立されたが、江戸期に興禅寺の境内に移転されている。

このように、まず臨濟宗雲巖寺からの展開がみられたが、室町期には曹洞宗の寺院が建立されている。宇都宮満綱内室の祖心院殿宮山玉芳（院殿号は後世付されたものと思われる）が開基となり、開山には美濃国今須いますの妙応寺三世の竺山得仙を招いて桂林寺を建立している。竺山は大徹派の人物であつた。なお、桂林寺はのちに成高寺（同寺については後述）の末寺となつているが、成高寺一一世（同寺の世代数には疑問点が多いが）の盛翁啓繁が桂林寺の八世として住持に就いてからのことである。竺山得仙の法系では運営できなくなり、成高寺から住持が入つて再興されたということであろう。桂林寺が末寺を持つようになるのは成高寺から住持を迎えたのちのことであり、天正年間以降のことである。

桂林寺について宇都宮氏が建立した曹洞宗寺院が成高寺（現在は宇都宮市埴田町）であつた。同寺は宇都宮正綱（芳賀氏より養子となる）が実父である芳賀成高の菩提のために中河原に伽藍を建立したことはじまる。ところが正綱は文明九年（一四七七）に死去してしまふ。そこで、子の成綱が文明十八年（一四八六）に成高寺を建立している。実質上の開山は長林寺

(足利市西宮町)二世の傑伝禅長で、開山に希明清良、二世にはその弟子で自分の師である大見禅竜を勧請し、自からは三世となった。これらの人びとは通幻派の人びとである。なお、成高寺は城近くの中河原にあったが、慶長二年(一五九七)に宇都宮国綱が追放されると他寺とともに破却され、その後の歴史も、いくつかある寺伝もそれぞれ異っている。しかし、元和年間(現在地)に移転し、元和八年に宇都宮藩主として古河よりきた奥平氏の外護を受けて再興されている。

宇都宮氏では内部における対立が激しかった。芳賀を中心とした宇都宮一族の塩谷・武茂^{むも}の三氏の間における主導権争いであつた。この争いの中で、武茂氏から宇都宮満綱の養子として入つたのが持綱であつた。彼は武茂綱家の子であつた。一単、持綱が宇都宮家に入ると、持綱―等綱―明綱と武茂氏の系統がその跡を継承していった。この間の武茂氏の宇都宮氏内部における勢力には相当のものがあつたろう。しかし、寛正四年(一四六三)、明綱が死去すると、芳賀氏から宇都宮家を嗣ぐ者が入つた。芳賀成高の子の正綱であつた。芳賀氏より入つた正綱が実父芳賀成高の菩提を弔うための寺院を建立し、宇都宮氏の菩提寺としようとしたのである。そのために従来受容されたことのない新しい門派が選ばれたのである。それが、その子の成綱にも継承され完成をみたのである。しかも芳賀成高の名を寺号として「成高寺」としたのである。芳賀氏から入つた正綱およびつぎの成綱が武茂氏の影響力を除き、芳賀氏の力を背景に宇都宮氏をまとめていこうとした正綱・成綱時代の宇都宮家の方針が、自からの父、祖父とはいえ、芳賀氏の当主であつた人物の実名を寺号にとつた寺院を建立したところに表われているとみることができよう。

成高寺は正綱の時に発願され成綱の代の文明十八年に完成しているが、正綱は三一歳で文明九年九月一日に、上野河曲陣中で病没し、九歳の成綱が跡を嗣いだのであり、成高寺が完成した文明十八年でも一八歳であつた。芳賀氏主導のもとで計画が進められていったに相違ない。このころの宇都宮氏の内部をみると、宇都宮成綱および力を増大させた芳賀氏に対して文明年間の終りごろに(文明は十八年まで)、武茂六郎という人物が謀反を起している。⁽²⁴⁾この謀反の結末は不明であるが、成綱の弟兼綱が武茂氏の名跡を継承しているところをみると武茂氏の嫡流は滅亡したとみることができよう。また、塩谷氏の場合は教

綱がすでに長祿二年（一四五八）に正綱によ

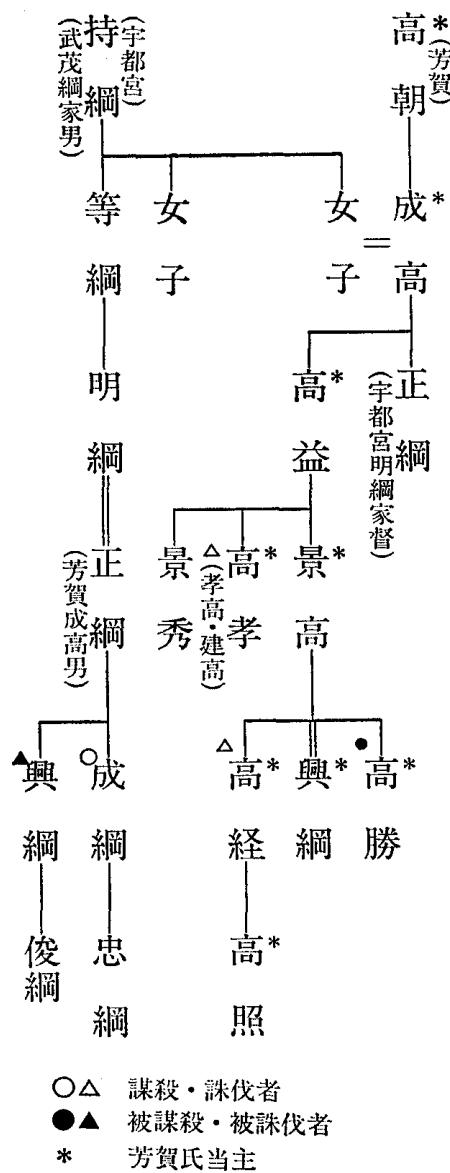
第2図

宇都宮氏と芳賀氏の関係図

つて殺害されており、のちに正綱の子の孝綱
 が入嗣して再興されている。⁽²⁵⁾ここに宇都宮氏
 は正綱・成綱および芳賀氏に対立した宇都宮
 氏一族の有力者であった塩谷・武茂の両氏の
 「下剋上」を封じ、それぞれの当主を殺害
 し、正綱の子供たち、すなわち成綱の弟たち
 を各家に入嗣させることに成功した。

文明十八年（一四八六）二月十八日、芳賀景高は宇都宮成綱（当時九歳）を補佐し、奉行人としての立場から成綱の意向を執り次ぐ形で一向寺に対して、岡本郷内の一向寺の給分田の諸公事・頭役銭・流鏑馬銭・番料足を免除する旨を伝えている⁽²⁶⁾し、延徳四年（一四九二）十月二日には、宇都宮成綱と芳賀景高が連署して成高寺に寺領を寄進しているが、⁽²⁷⁾それには、宇都宮成綱の名よりも一段下げて芳賀景高の名が書かれている。これは、本来ならば、宇都宮成綱の名のみでよいはずであるが、景高の名が書かれることによって、よりこの寄進状の重みが増すという意味があったものと考えられる。芳賀氏の力が相当に強いものであったことがうかがえる。このように、さきに、塩谷氏の「下剋上」を押し、おそらく文明年間（終りごろには武茂氏の「下剋上」）を押し、芳賀景高が奉行人としての立場から活動しはじめた文明十八年に芳賀成高の名をとった成高寺が本格的な規模の寺院として完成しているのである。ただ、文明十八年完成ということは、成高寺所蔵の文書の最初が宇都宮成綱の文明十八年五月二十九日付の寄進状であることから、付されたことかもしれない。しかし、いずれにしても文明十八年前後には完成していたことは相違なからう。

芳賀氏が相当の力を持ったことは成高寺に出された宇都宮成綱の寄進状や芳賀氏の副状等をみるに明らかであるが、芳賀氏



の勢力が増大するにつれて、宇都宮氏は危機感を強めたであろう。芳賀氏は景高から高勝に継承されて、その力をますます強めていったようである。ついに永正九年（一五一一）四月宇都宮成綱は芳賀高勝を「生涯」するに至る。そして、この事件は、一大内紛に発展する。いわゆる「宇都宮錯乱」と称されるものである。⁽²⁸⁾

さて、芳賀高俊は鬼怒川の東岸に位置する竹下に正応四年（一二九一）ごろに飛山城を築き、本拠を芳賀（真岡）から同城に移したといわれているが、同城の東側に同慶寺という福寺を開いている。開山には那須雲巖寺開山の高峰顕日の弟子の大同妙喆という人物であった。それから約一世紀半後には景高が宝珠庵（のちの海潮寺）を芳賀城（真岡城）からさほど遠くない吹上（大田和）というところに開創している。「宇都宮成綱安堵状」⁽²⁹⁾によれば、永正七年（一五〇七）かそれ以前の建立である。開山には成高寺四世（実質は二世）の天英祥貞が招かれているが、これは形式的なものであり、実際に同庵の運営に当たったのは、二世の久室栄昌であったと考えられる。この永正七年四月八日すなわち、釈迦誕生の日宇都宮成綱は自筆の「宝珠庵」という額字を納めている。芳賀景高の要請に応じた形で書いたものと思われる。おそらく海潮寺の前身宝珠庵の成立はこの時であったとみてよいのではなからうか。さて、この建立された時期は永正九年の「宇都宮錯乱」の少し前であり、芳賀氏の力が最大に伸長していた時期であり、それが、禅宗寺院建立となってあらわされたとみるべきであろう。なお、この時期に主家の菩提寺成高寺から僧侶を招いて寺院を建立したのは、芳賀氏ばかりでなく、上三川の今泉盛朝は永正元年（一五〇四）に長泉寺（開山は天英祥貞）、祖母井吉胤は明応三年（一四九四）に東伝寺（開山は成高寺一二世の弟子とされる）を建立し、塩谷氏は長享年間（一四八七～八九）に浄土宗寺院であった長興寺（開山は傑伝の弟子）を曹洞禅に改宗している。

宝珠庵（海潮寺）は大永年代（一五二一～二七）の初めに真岡の現在地（田町）に移転したといわれているが、これは芳賀氏の真岡城および城下の形成と深くかかわっていたものと考えられる。それは、真岡城近くに他寺も集められていることから知られる。天台宗の般若寺が天文年間（一五三二～五五）に古聖というところから真岡城近くに移転してきており、やはり天台宗の円林寺は永祿四年（一五六一）に横田（二宮町）から北上して五行川の流れが作った丘である島という場所に移転して

きている。真岡城とは五行川をへだてて南東に位置しており、曲輪の役割を担わされたものと考えられる。これらの寺院の移転は真岡城の形成と深くかかわって行われたとみてよからう。

さて、「宝珠庵」の名称は天文四年（一五三五）四月十日に芳賀高経が自筆の「宝珠庵」という額字を掲げており、この時点では宝珠庵と称していたことが知られる³⁰。しかし、翌五年十月二十四日付の「芳賀建高寄進状」³¹は海潮寺に充てて差出されており、寺名改称は天文四年四月十日から翌五年十月二十四日の間になされたといえよう。寺名を変えるほどであるから、よほどその環境に変化がみられた、と考えるならば、大永年間の移転ではなく、あるいは天文四年から五年にかけてであったかも知れない。

大永から天文年間にかけての芳賀氏は、大永六年（一五二六）十二月、興綱（宇都宮正綱の子）が甥の宇都宮忠綱を撃破・追放し、宇都宮氏の当主の地位に就いた。それまで、興綱は芳賀高勝生害後の芳賀氏の当主であったので、それ以降は芳賀高孝と同高経が芳賀氏の中心的地位につくことになった。その後、宇都宮氏の重臣として勢力増大させ、天文三年（一五三四）以前に興綱の権力を奪い、天文五年八月十五日ないし十六日には「生害」するに至っている。「下剋上」（両氏は養嗣子等の関係が入組んでおり血縁的にも濃い関係にあり真の意味での「下剋上」とはいえない面もあるが）の成功であった。大永六年から天文五年ごろは、芳賀氏の力がもっとも増大した時であった。そのような時の真岡城の形成であり、海潮寺の移転（と改称）であったとみることができるとは。

おわりに

曹洞宗寺院の建立や移転が結城氏と多賀谷氏、宇都宮氏と芳賀氏の「下剋上」や「誅伐」と深くかかわりあってきたことをみてきた。結城氏と多賀谷氏の対立では結城玉岡の安穩寺が、結城氏から多賀谷氏が独立する際には下妻の多宝院の成立が

かわり、宇都宮氏の中での芳賀氏の力を示したのが成高寺の成立であり、宝珠庵（のちの海潮寺）の成立であり、真岡城近くへの移転であったのである。

注 (1) 拙稿「中世後期における禅僧・禅寺と地域社会―東海・関東地方の曹洞宗を中心として―」（『一九八一年度歴史学研究会別冊特集

・地域と民衆』）。

(2) 市村高男「結城政朝と戦国時代の開幕」（『結城市史』四、古代中世通史編第四編第一章第一節、五三七頁以下、一九八〇年）、大久保仁「下総結城における中世領主勢力の展開と寺院——結城氏と禅宗を中心に——」（『花園史学』五、一九八四年）。なお、大久保氏の論文は、市村上掲論文と拙稿「曹洞禅の展開と結城氏」（『結城市史』四、第三編第六章第四節、一九八〇年）をもとにして成稿されたものという。

(3) 『結城市史』一、古代中世史料編、七一二頁。

(4) 同右、七一五頁。

(5) 「結城成朝書状写」（『安穩寺文書』、『結城市史』一、古代中世史料編、七一頁）。

(6) 「多賀谷朝経寄進状」（同右、七一頁）ただし、この文書以下、「安穩寺文書」中の多賀谷朝経、慶音尼・俊綱、結城成朝、多賀谷氏家、多賀谷朝泰の寄進状については検討を要するが、ここでは、その内容には小なからず真実を含んでいるものとして論を進めることにしたいと思う。

(7) 「多賀谷朝経寄進状」（同右、七二頁）。

(8) 「多賀谷朝経寄進状」（『光明寺文書』、『結城市史』一、古代中世史料編、二六一頁）。

(9) 「小山寺三重塔棟札銘」（『結城市史』一、古代中世史料編、七四一頁）。

(10) 「結城成朝寄進状」（『安穩寺文書』、『結城市史』一、古代中世史料編、七二頁）。

(11) 「結城成朝寄進状」（同右、七二頁）。

(12) 「結城成朝安堵状」（同右、七三頁）。

(13) 「結城家之記」（『結城市史』一、古代中世史料編、六八四頁）。

(14) 同右、六八四頁。

(15) 同右、六八四頁。

- (16) 同右、六八四～五頁。
- (17) 同右、六八五頁。
- (18) 「多賀谷氏家寄進状」(『安穩寺文書』『結城市史』一、古代・中世史料編、七三頁)。
- (19) 「多賀谷朝泰寄進状」(同右、七三頁)。
- (20) 注(1)論文。
- (21) 注(1)論文。
- (22) 拙稿「源翁派の永平寺・総持寺出世問題と関東寺院の動向―『安穩寺沙汰書』『会津示現寺沙汰書』を中心として―」(『曹洞宗研究員研究紀要』一二)。
- (23) 「結城政勝書状」(『結城市史』一、古代中世史料編、七三～四頁)。
- (24) 「足利成氏小峯參河守充書状」(年末詳八月二八日付「足利成氏鑿右京亮充書状」(年末詳十一月十九日付)、いずれも『栃木県史』史料編中世三、「白川文書」、「秋田藩家蔵文書」。詳しくは、新川武紀「芳賀氏勢力の伸展」(『真岡市史』六、原始古代中世通史編、第九章第二節、六〇二頁以下)。
- (25) 市村高男「永正九年の『宇都宮錯乱』について」(『宇都史学』四)。
- (26) 「芳賀景高書状」(「一向寺文書」『真岡市史』史料編二、中世、一四三号)。
- (27) 「宇都宮成綱・芳賀景高連署寄進状」(『成高寺文書』『真岡市史』史料編二)。新川注(24)論文参照。
- (28) 市村注(25)論文。
- (29) 「海潮寺文書」(『真岡市史』史料編二、中世一六二号)。
- (30) 「同右」(同右、二二六号)。
- (31) 「同右」(同右、二二七号)。

〔付記〕

杉山博先生の古稀を心よりお慶び申し上げます。くれぐれも御健康に御留意なされ、今後ともお元気に御活躍なされますよう祈念申し上げます。なお、本稿は駒沢大学教授所理喜夫氏を研究代表者とする、一九八六～八年度文部省科学研究費総合研究(A)「徳川將軍権力の生成と展開の研究」における研究分担としての成果の一部である。